

『移民の衣食住Ⅱ：海を渡って住むこと』

河原典史*・佐藤量** 編著、文理閣、2025年

李 裕淑†

2021年に刊行された『移民の衣食住Ⅰ：海を渡って何を食べるのか』は、移民研究における「食」という生活文化の側面に焦点をあて、豊富な史資料と多様な地域事例をもとに、移民が異郷でどのように食生活を維持・変容させてきたかを描き出した研究書であった。専門的な研究成果でありながら、18本のコラムを含む構成によって一般読者にも開かれた同書は、移民研究の裾野を広げた点でも評価が高い。本書『移民の衣食住Ⅱ：海を渡って住むこと』は、その続編として「住」を主題に据え、前著を上まわる10本の論文と6本のコラムを収めた学術研究書である。編者らが前著で示した「生活文化から移民を捉える」という視点がさらに深化され、移民の住環境を歴史的・社会的・文化的に多角的に分析することで、移民研究の新たな地平が切り開かれている。

本書の大きな特徴は、歴史学・地理学・社会学・文化人類学といった複数の学問分野の研究者が、新聞・写真・統計資料・オーラルヒストリー・間取り図など多様な史資料を精査し、視覚資料を豊富に掲載している点である。これにより、移民の住環境を抽象的な概念ではなく、具体的な生活実態として読者に提示することに成功している。専門書としての学術的厳密さを保ちながら、一般読者にも理解しやすい構成となっている点は、前著に引き続き本書の大きな魅力である。

多様な地域事例で見る住まいの生活文化史

第1部「アメリカ世界に住むこと」では、アメリカ西海岸やハワイ、カリフォルニア州を舞台に、移民の住環境がどのように形成され、どのような制約を受けていたのかが描かれる。

第1章「日本人移民と住まい：戦前のアメリカ西海岸を中心に」（大関原一浩）は、戦前アメリカ西海岸の日本人移民が暮らした住居を、オーラルヒストリーや日本語新聞、写真、統計資料を用いて詳細に描き出す。鉄道建設現場の「セクションハウス」や「バラック」、貨車を住まいとした「ボックスカー」、農業労働者の「バンクハウス」など、移民が置かれた厳しい住環境が浮かびあがる。都市部の「ルーミングハウス」もまた、低賃金労働者の生活の厳しさを象徴している。日本的な建築要素がほとんど見られない背景については、州法による移動の強制や差別的環境が指摘され、移民の住環境は社会的・法的制約によって規定されていたことが明らかにされる。

* 立命館大学文学部 教授

** 立命館大学生存学研究所 客員研究員

† 立命館大学コリア文化研究センター 客員研究員

leeyousuk@hotmail.com

第2章「ホノルルにおける日系人の白人家庭労働：『日布時事』の記事などにみる」（飯田耕二郎）は、ハワイ・ホノルルの白人家庭で働いた日系家内労働者に焦点をあてる。『日布時事』の求人広告や特集記事、『布哇年鑑』、国勢調査などによって、就業種や待遇、雇用主との関係を明らかにされる。官約移民初期から戦後までの長い時間軸を扱う本章は、これまで研究が乏しかった家内労働の実態を丁寧に掘り起こしている。白人の住む地域の周辺に日本人の集住地が形成されたとあるが、どのような住居環境であったか今後の研究が期待される。

第3章「安住と定住を求めて：カリフォルニア州のユダヤ人と日系人を手掛かりに」（駒込希）は、カリフォルニア州外国人土地法をめぐるユダヤ人と日系人の反応を、ユダヤ系新聞『エマニエル』『ブネイ・ブリス・メッセンジャー』の分析から読み解く。差別的法制度に対する両者の立場の違いを示しつつ、日系人がユダヤ人問題を利用して自らの定住戦略を模索した側面を指摘する点が興味深い。移民が置かれた不安定な社会的立場と、そこから生まれる政治的行動の複雑さが浮かびあがる。

第2部「別世界に住むこと」では、スペイン風邪や結核、戦時強制収容といった危機のなかで、移民がどのように住環境を整え、共同体を維持しようとしたのかが描かれる。

第4章「バンクーバーにおける日本人移民とスペイン風邪：日本語新聞『大陸日報』からの分析」（河原典史）は、日本語新聞『大陸日報』を精査し、スペイン風邪が猛威を振るった時期のカナダ・バンクーバーにおける日本人移民社会の対応を明らかにしている。パンデミック到来後、日系社会はストラスコーナ学校に避難所と病舎を設置し、『大陸日報』を通じて感染防止策や注意喚起を積極的に発信した。さらに、メソジスト教会のボランティアによる看護・介護活動や寄付の広がりなど、コミュニティ内部での支援体制の形成過程が具体的に示される。これらの取り組みは、当時の日本人移民社会が限られた資源のなかで連帯し、危機に立ち向かった姿を鮮明に描き出している。

本章は、移民社会の自助的対応を歴史資料から丁寧に掘り起こし、パンデミック下のコミュニティ形成を考えるうえで示唆に富む論考となっている。

第5章「バンクーバーの日本人健康相談所：その結核への取り組み（1932～1942年）」（坂口満宏）は、バンクーバーの日本人健康相談所の結核対策を取りあげる。失業・貧困と結核が深刻化する1930年代、相談所が市衛生課と協力しつつ、女性団体の支えによって運営されていた点が強調される。移民社会の自助努力や公的機関との関係が丁寧に描かれている。

第6章「戦時強制収容施設という『住居』：日系人たちのすまいをめぐる苦闘」（尾上貴行）は、アメリカ合衆国の戦時強制収容所の住環境を、政府側と収容者側の双方の視点から分析する。地図や室内見取り図、写真を用い、住居と呼ぶにはあまりに劣悪な環境が示される。人種差別と戦時体制のなかで、立憲主義や市民的自由がいかに侵害されたかが浮き彫りとなる。

第7章「マンザナー国定史跡における復元プロジェクト：日系人抑留者の庭園と鯉池」（秋山かおり）は、アメリカ・カリフォルニア州マンザナー国定史跡の庭園復元プロジェクトを取りあげる。この日系人収容所跡地には収容者たちによる造園の痕跡が100か所以上確認されているが、その中の公共の庭「メリット・パーク」と家庭の庭「アライ家の鯉池」に注目している。造園活動が単なる日本文化再現ではなく、子どもの遊び場や家族の心の支えとして機能していたことを明らかにした。抑圧された環境のなかでも美を求め、生活を整えようとした移民の姿が印象的である。

ただし、強制収容所に収容され、隔離された別世界に住むことになった日系人の、強制収容所という住環境で培われた生活経験が、退所後の居住選択やコミュニティ形成、アメリカ社会への再適応にどのような影響を及ぼしたのかについては、示されなかった。収容所での経験が戦後の生活再建にど

のように活かされたのか、あるいはどのような困難を残したのかを検討する次の論考が期待される。

第3部「アジア世界に住むこと」では、日本・満州・イスラエルを舞台に、住まいをめぐる多様な実践と思想が論じられている。東アジア思想や在日コリアンの戦後精神史を研究してきた立場から見ても、本部の議論はきわめて興味深く、東アジア移民史の視点からも多くの示唆を与えるものである。この第3部については、とりわけ丁寧に検討したい。

第8章「留学生の住環境と戦前日本社会：丸山伝太郎の翠松寮を基点として」（木下昭）は、1920年から終戦期にかけての東京における中国人留学生の居住実態を、統計資料や先行研究を用いて整理し、とくに牛込区山吹町の寄宿舍・翠松寮に焦点を当てて論じている。日華学会が所有したこの寮は、丸山傳太郎・良子夫妻による家庭的な運営と幅広い支援活動の特徴とし、男女を問わず多くの留学生を受け入れていた。

『日華学報』などの資料をもとに、留学生が丸山夫妻を親のように慕った背景には、同志社で培われた理念に基づく献身的な姿勢があったことが示される。当時、日本社会には国益や偏見に基づく差別的対応も存在したが、翠松寮はそれとは異なる価値観に立脚していたという点が本論文の重要な指摘である。

本章は、留学生の住居という具体的な生活空間を通して、日中関係史の一側面を鮮明に描き出した意義深い研究である。

第9章「満洲の住宅と衛生：『満洲建築協会雑誌』の分析から」（佐藤量）は、『満洲建築協会雑誌』の分析を通じて、満洲の日本人住宅がどのように形成され、どのような思想と条件のもとで展開していったのかを丁寧に描き出している。大陸性気候による厳しい寒冷と乾燥、急速な人口増加にともなう住宅不足、そして感染症の多発という三つの要因が、住宅設計に決定的な影響を与えた点が明確に示される。

満洲では「家」よりも「家庭」を重視する生活観が広まり、内地の住宅様式を移植しつつも、現地の自然環境に適応した住まいが模索された。満洲建築協会が繰り返し住宅コンペを開催し、満洲にふさわしい住宅モデルを追求したことは、その象徴的な取り組みである。また、1936年の満洲農業移民政策のもとで住宅整備が急務となり、三浦運一による煉瓦造の試験家屋が理想的モデルとして提示された。しかし、移民数の急増により住宅供給は逼迫し、満洲拓殖公社が導入した組立式住宅は、防寒性や換気性能の面で十分とは言えなかった。

総じて本章は、日本人住宅が内地の様式を基盤としながらも、満洲特有の自然条件、社会状況、さらには戦時体制の政治的要請のなかで形づくられていった過程を的確に描き出しており、植民地建築研究に重要な視点を提供していると言える。

一方で、日本人が政治・軍事・行政の中枢を担い、事実上の宗主国民として優越的地位を与えられていた満洲において、住宅整備の過程で現地の中国人社会との摩擦や交渉がどのように生じたのかについては、本章では十分にふれられていない。土地取得や住宅建設が現地住民の生活空間にどのような影響をおよぼしたのか、また日本人住宅の形成が地域社会の空間秩序をどのように再編したのかといった点は、今後さらに検討されるべき重要な課題であろう。

第10章「ユダヤ人の Home とは何か：社会心理学的見地から」（吉村季利子）は、イスラエルのユダヤ人が抱く“Home”の概念を、建国期と1967年以降のゴラン高原、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区とシナイ半島の占領を経た現在とで比較し、その変容をローレンス（Lawrence, R. J. 1987. *What Makes a House a Home? Environment and Behavior* 19: 154–168）の理論を軸に考察している。ローレン

スが示すように、“Home”を文化・社会・心理・政治・経済といった多層的要因が凝縮した概念として捉えることで、ユダヤ人にとっての“Home”が単なる居住空間ではなく、歴史的経験と深く結びついた象徴的基盤であることが理解できる。

ユダヤ人は、国を持たず迫害を受け続けた過去と、建国後の対パレスチナ紛争という現在の現実を切り離して“Home”を語るができない。著者は、こうした歴史的背景のもとで“Home”が民族的アイデンティティの拠り所であり、安全保障の象徴として強く意識されている点を指摘する。

本章は、“Home”という身近な概念を通して、イスラエル社会の歴史的・政治的文脈を読み解く視角を提示しており、ユダヤ人の自己認識と国家形成を理解するうえで示唆に富む論考となっている。

本書の射程を広げるコラム群

本書に収められた各コラムは、日本人移民の生活世界を多角的に照射し、地域・時代・階層の差異を超えて「移民として住むこと」の複雑さと豊かさを浮かびあがらせている。

第1部では、デイ多佳子「戦前のシカゴにおける日本人・日系人の居住パターン」が、国勢調査原票の分析を通して、シカゴの日本人移民が特定のエスニック・エンクレーブに集住するのではなく、むしろ周縁部へと拡散していった事実を明らかにする。彼らが「独立自主のパイオニア的生活」を志向したという指摘は、従来の移民研究のイメージを揺さぶる興味深い視点である。

続く鈴木哲「ホノルル風呂屋物語」は、1885年の官約移民開始以降、ホノルルに形成された日本人社会を、風呂屋という生活文化の場から描き出す。一世の生活実態が具体的に示される一方で、その衰退とともに風呂屋も姿を消していく過程が、移民社会の盛衰を象徴的に物語っている。

半澤典子「戦後におけるブラジル・トメアスー移住者の住居」は、戦後移住地トメアスーの農業基盤や生活様式を取りあげ、さらに移住者が詠んだ俳句を交えて考察する点がユニークである。生活の質感や心情が俳句を通して表れ、単なる生活史を超えた文化的理解へと読者を導く。

第2部では、志賀恭子「宗教と感染症：アメリカ移民社会のジレンマ」が、宗教的解釈が感染症対策に影響をおよぼす事例を紹介し、移民社会が抱える医療・信仰の葛藤を浮き彫りにする。続く堀絵里香「テキサス州クリスタルシティ抑留所に建設されたプール」は、抑留所内に造られた大規模な円形プールの建設を手がかりに、異民族間交流という抑留生活のもう一つの側面を描き出している。

第3部の今里基「在韓日本人の『ジオッコ』暮らし」は、半地下や屋塔房、考試院といった韓国の低所得層の住居形態を「地屋考（ジオッコ）」として紹介しつつ、著者自身の経験を交えてその過酷さと日常性を語る。「地獄苦（ジオッコ）」と同音であることが示すように、生活の厳しさが生々しく伝わってくる。

いずれも、これまで十分に知られてこなかった生活実態が具体的に描き出されている。とりわけ、移民の住環境が社会的地位や宗教観、民族間関係、都市構造など多様な要因によって規定されていることを示す点で、コラムは本書全体の射程を大きく広げている。

見知らぬ土地に渡った移民にとって、住居の確保は常に困難をとめない、住む場所を自由に選ぶことは難しかった。衛生的で快適な住環境を望みながらも、それを実現するには多くの障壁が存在した。本書は、移民の「住」を軸に、地域・時代・民族を横断する多様な事例を取りあげ、移民の生活世界を立体的に描き出している。豊富な史資料と視覚資料に支えられた論文とコラムは、移民研究に新たな視角を提供するだけでなく、現代の居住問題を考えるうえでも多くの示唆を与えてくれる。

移民研究の深化に寄与する学術書として、また生活文化史の豊かな資料として、本書は研究者や学生のみならず、移民の歴史や生活文化に関心をもつ幅広い読者に薦めたい一冊である。